英知大学同窓会会報

Alma Mater SAPIENTIA

Vol.13
Mar.15.2000

発　　行：英知大学同窓会
〒661-8530
兵庫県尼崎市若王寺2-18-1
発行責任者：野　村　　裕
編　　集：英知大学同窓会

●ようこそ同窓会正会員へ……1
●岸学長ご挨拶「2000年紀を迎えて」……2
●新しいロゴマークを紹介します……2
●新執行委員会の紹介……2
●同窓会事務局便り……3
●同窓会に思うこと……4
●関東支部ニュース……4
●つれもていこら和歌山グループ……4
●学内・企業研究会開催される……5
●起業家精神のすすめ……6
●退官された先生からのメッセージ……7
●OB戦を終えて……8
●第33回英南戦を終えて……8
●編集後記……8

ようこそ同窓会正会員へ

会長　野村　裕

早春の候、ここにめでたくご卒業された4回生の皆様ご卒業おめでとうございます。また、今日より正式に我が「英知大学同窓会」正会員になられ、心より会員一同お迎えしたいと思います。

先日、ある記事で読みましたが、新成人のマナーの悪さは「定説」になっているらしい。式典中の私語や携帯電話で会場がざわめくのは当たり前。来賓の挨拶などは誰も聞いていない。「つまらない挨拶を聞くより、友達とおしゃべりした方が楽しいじゃん」ということらしい。各自治体は「こんな成人式なら、ばかばかしくてやってられない」という気持ちだろう。

明治の文明開化に、誰かが英語のフリーダムを「自由」と訳した。これは数ある誤訳の中で、とびきりである。フリーダムは他からの拘束・束縛・強制・支配を受けない事という意味だが、「自由」にそんな意味はなかった。「欲しいままに振る舞う」という意味で使われていた。「あれ買って」と泣きわめく子供がいるが、その振る舞いが「自由」。つまり、何をやっても責任を問われない行動。勝手気侭、我侭と同じ意味だった。

新成人のマナーの悪さは、「自由」の本来的な意味に立ち戻ったといえる。式典中の私語や携帯電話は、束縛からの解放を意味しない。幼児的な自由だ。ならば新成人にこう訓辞したらよい。

「勝手にしなさい、気侭にやりなさい、それはあなたの自由ですよ。その代わり、幼児ではないのだから、責任を問われることもありますよ。それぐらいの覚悟があるんでしょうね。」という、今風の若者気質を反面風刺しているものでした。

ここにあるように、これからの社会生活は「自己責任」を自らが考え、行動し、責任を問われることになります。自ずと各個人の「生きざま」がその人の歴史を背景とした評価につながります。ひいては、出身学校を背中に背負い世に問われる場面が多くなるものと思います。

我々同窓生の社会での活躍なくしては大学を問えません。その為にも、自らの出身大学に誇りを持ち、広く各領域で活躍されますことを祈ります。

2000年紀を迎えて…

学長　岸　英司

本学同窓会の皆様、ミレニアムおめでとうございます。1963年創立された本学はいわば壮年期を迎えました。日本の各大学は今、21世紀への生き残りをかけて努力しております。私の学長職は今年の4月から2期目を迎えますが、同窓会の皆様と共に、皆様の母校英知大学の存続と発展のために努力したいと願っております。

今、大学にとって一番大きな問題は、受験人口の減少です。一人でも多くの受験生を獲得するため、役に立つことは何でもしなければなりません。大学のPR、オープンキャンパスの実施、各高校への訪問、入試説明会の開催等です。受験雑誌の広告、新聞への広告、宣伝費は今、莫大な金額にのぼっています。同窓会の皆様のお子様たちも入学しています。

さて、2000年紀を迎えて、キャンパス整備は一応終わりました。現代にアピールする大学づくりはこれからずっと続く課題です。

社会から大学が評価されるためには、大学での教育内容が今の時代に合ったものでなければならないのは当然のことです。本学でも、今年から新入生には必修のコンピューター入門、基礎演習が始まります。しかし、これだけではなく、学生の世話のために専任の先生には全員、オフィス・アワーを決めて、学生の相談や指導に当ててくれるようお願いしております。学生の学力の増強、就職の前進等成すべきことは山積みしております。語学教育の方は、国際言語教育センターを中心として、アシスタント教員による、英・西・仏語の授業以外のクラスで今盛んです。皆様の中にも会話を勉強されたい方はどうぞご参加ください。お待ちしております。大学の発展のために協力していきましょう。

同窓会の皆様と皆様のご家族の上に、神様の豊かな祝福がありますようお祈りして、私の挨拶といたします。

新しいロゴマークを紹介します。

紋章の円は完全性をあらわし、無限・永遠・神をあらわしている。中央に十字架があり、降下する鳩が描かれている。ここで鳩は神の霊である聖霊を象徴し、神からくる眞理と英知を表す。

オリーブの枝をくわえている鳩は平和を見出した魂を意味し、さらにオリーブの8枚の葉はキリストの山上の説教にある8つの眞の幸福を表している。

標語はラテン語学で書かれているが、上部の4文字は英知大学の正式名称「大阪カトリック大学英知」であり、下部の3文字は「英知と力」である。この言葉は大学歌の中でも「智恵と力を鍛えんと」と表現されているが、これは旧約聖書ヨブ記第12章13節の「神と共に、英知と力がある」からとられたものである。

この紋章と標語「英知と力」これが英知大学創立の精神である。

新執行委員会の紹介

新執行委員会として、これから何をなすべきか。この1年という短い期間の中で、何ができるのか、という問いに直面したとき1つだけいえることがありました。それは、充実した1年にすること。これは単に執行委員会だけのことに限らず、全学生がそう思えるようにするということです。そのことを口にするだけではなく、実行し達成するのは容易ではなくすごく大変なことだと思います。

しかし、そういう難問を解き、達成したときには、このうえない喜びと執行委員会としての成長、更に人間としての成長があり、それこそが学生生活の充実につながるのではないかと考えています。

そのプランの一環として今考えていることは、この1年で新しい行事を増やしていくことです。これは、単に遊びという目的のものだけでなく、全学生が英知大学の学生であるということを認識することであり、学生会というものは、学生の力で創り上げていくものであることを理解してもらえるものにしていきたいと思っています。

そして、最終的には、学生の活性化を担うものであり、英知大学の発展の向上を考えています。

英知大学学生会執行部会長
仏語仏文学科2回生　井上　純一

平成12年度
英知大学執行委員会幹部
会長　井上　純一
副会長　福本　学
書記　安原　弘
会計　堀　直紀
総務　三島　一亨

同窓会事務局便り

'98英文卒　渡辺　千晶

同窓会に関わってもうすぐ1年が経とうとしています。時が経つのは本当に早いですね。

秋の会報発行から今回までの間には、11月のホームカミングデー、12月のクリスマス・ミサと同窓会のイベントが開催されました。

ホームカミングデー前には委任状の整理や総会や懇親会の準備とあっという間でした。委任状の返信や総会への参加が少なく残念でしたが、懇親会には多くの卒業生や教職員の方々の参加があり、現役の学生も顔をのぞかせてくれました。今回は、現役生の活躍を知ってもらい、交流を深めようとサッカー部はOB戦をし、応援団にはエール、チアリーダー部には演技を披露してもらいました。ビールやジュースで乾杯し、旧友や先生方と懐かしい話に花を咲かせ、お互いの近況を報告したり、また大学祭実行委員会との合同の大ビンゴゲーム大会やファイヤーストームを楽しんだり…。そんな皆さんの姿を見て、同窓会役員一同「今年も無事開催できてよかった」と喜んだ次第です。

また、クリスマス・ミサは前年より参加者は少なかったようですが、和田神父様や卒業生の市瀬氏にミサをあげていただき、カトリック校ならではのイベントを楽しみました。このミサも、ホームカミングデーに続く同窓会イベントにできたらと考えていますので、是非お友達やご家族とご参加下さい。心よりお待ちしています。

事務局の仕事を始めて、またホームカミングデーをきっかけに私は、卒業生はもちろんのこと学生と接触する機会が増えました。先日は就職部の企業研究会のお手伝いをさせていただき、就職の決まった4回生やこれから就職活動に取り組む3回生と話すこともできました。そんな中である学生が言っていました。「僕は大学内の先輩だけでなく、クラブのOBの方ともおつきあいさせていただいているのでいい社会勉強になります」と。実際に社会でがんばっておられる方と話ができるということは、学生にとって今の学生生活の中に自分の将来につながるものを見つけることのヒントにもなるし、就職活動にも刺激を与え、実際、社会に出てから役に立つことも多いと思います。もちろん忙しい毎日を過ごしていらっしゃる皆さんです。でも、「どうだ、やってるか?」という言葉と共に、たまには後輩たちの様子を見に来てみてはいかがでしょう。直接のつながりがなくてもいいじゃないですか。同じ英知大学生なのです。一緒に汗を流すもよし、たわいもない話をしたり、叱咤激励(?!)をするもよし、後輩と親睦を深める…これも同窓会ができる活動の一つではないかと思うのですが…。

さて、事務局の存在を認識していただけるようになったであろう今日この頃、「同窓会をしたいのですが…」というお電話をよくいただきます。事務局の方としても、できるだけ皆さんの現住所がわかるように努力していますが、なかなか…。しかし、「連絡先がわかりましたよ!」の声とともに不明者の方の連絡先をお知らせ下さる方も多く、本当に感謝しております。ありがとうございます。皆様も住所変更などありましたら、ご面倒だとは思いますが同窓会事務局に是非ご一報下さい。また、最新の名簿が欲しいという声もあり同窓会としても4年に1度の名簿発行の時期となったのですが、資金面の問題もあり1年先送りすることになりました。楽しみにしていただいていた方には本当に申し訳ありません。なおご存知だとは思いますが、名簿の配布につきましては、「4年連続で年会費(¥3000)を納めていただいた方、もしくは終身会費(¥30000)を納めていただいた方には特典として配布」させていただくことになっていますので、どうぞよろしくお願いします。

それから一つお知らせが。昨年、蛭田とも子さんよりこんなおハガキをいただきました。

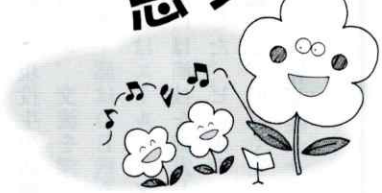
「…私もカトリック校として家庭的な良さを知っていただけたらと念じて、天使印刷所発行のカレンダーに英知大学の写真を送りました。カトリックカレンダー2000年の表紙に英知大学の写真が載りました。…」

このはがきを読み、私も英知大学近くの聖パウロ書院へ行ってみたところ…ありました!表紙に英知大学本館のマリア像の写真が載っていました。皆さんも良かったらご覧下さいませ。蛭田さん、ありがとうございました。

これからも皆様の同窓会へのご支援・ご協力、また活動に対するご感想・ご意見をよろしくお願いします。

《お問い合せ先》
英知大学同窓会事務局
渡辺まで
Tel.&Fax. 06-6498-6258
e-mail
sapiens@mbox.inet-osaka.or.jp
※月・木・金曜日の9:00AM～4:00PM。それ以外は留守番電話、FAXが受け付けますので、お気軽にお問い合わせ下さい。

同窓会に思うこと



音楽理論　担当　石垣博子

明日　開け行く新世紀
平和を願う四十億
人の工は進めども
まことの幸に程遠し
世の礎育くまん
英知よこの世の光なれ

一般教養の音楽を教え始め今年で早12年、多くの卒業生を送りましたが、特に卒業式では、冒頭に掲げました大学歌（作詞　元副学長故大園義興師、作曲　元仏語仏文学科教授　ジャン・メルオー師）の歌詞を胸に刻み、大学生活で得た体験を大切に社会へと羽ばたいて欲しいと、祈りを込めてオルガンを演奏させていただいております。また、この卒業式でスピーチされます同窓会会長のお話には、大学そして後輩の学生達への熱い思いがひしひしと伝わってきます。

昨年の12月20日には、サピエンチアタワー10階で、同窓会主催のクリスマス・ミサが捧げられるのでその典礼音楽のお手伝いをと依頼され、喜んでお引き受けいたしました。一刻一刻と日が沈むとともに、祭壇のエメラルドグリーンのローソクの灯が煌々と輝く中で、同窓生とそのご家族、在学生そして教職員が一つとなり神様を賛美している姿には、カトリック大学ならではの家庭的平和を感じました。これからも、卒業生・在学生・教職員が共に集まり、言葉・世代を越え、私たちの心を一つに結んでくれる"歌"を通して、一致する機会がありますことを希望いたしております。

子供が、お母さんの懐で安らぐように、同窓会に集う人々が、この会報誌の表紙にある"Alma Mater"（尊い御母）の許で、安らぎの憩いを味わう、そんなホッとするあたたかな場となりますようにお祈り申し上げます。

関東支部ニュース

'78仏文卒　永森　孝夫

［2000年6月24日(土)］

まず、ご自分のスケジュール表に「関東支部創立10周年支部総会」と記入してください。

ご協力ありがとうございました。

振り返れば、90年代の日本は急速なバブルの崩壊とその後始末に明け暮れた10年だったと言っても過言ではないでしょう。今も金融関係や建設関係など不良債権の処理を先送りしている様な業界がまだまだあるとは言え、新しい企業、特に情報関係があっという間に一定の地位を築き、これからもどんどん加速していきそうな勢いで、それらを見ると日本も回復基調にあるのかなと思ったりもします。

さて、そのような中で我が関東支部は1991年に東京で産声を上げ、地域の特性上か会員の出入りが激しいにも拘わらず、今では240名を越えるに至りました。これからも増えていくのは間違いありません。そういう大事なエリアで私を含め支部役員一同は少しでも会員同志の知り合いが増える様、情報ネットワークを構築したり、色々なイベントを企画したりしますが、我々の力が足りないため、順調にいっているとはいえないのが現状です。それでもめげずに明るくやっています。

しかし、今年は違いますよ!!6月24日(土)には関東支部の10周年のメインイベントとして皆さんの記憶に長く残る意義のある支部総会を企画しております。主賓に岸学長をお招きし、記念のミサをあげて頂く予定です。これだけでも感動ものですが、それだけでは終わらせないのが関西人の真骨頂。…しかし、後は来ていただいてのお楽しみとさせていただきます。

英知大学も一昨年サピエンチアタワーができ、一段と大学としてのレベルをあげました。我々同窓会を預かる一員としましては役に立つ企画を本部役員共々考えてまいりますので、今後共々ご支援の程、よろしくお願い致します。

つれもどいこう 和歌山グループ

'76英文卒　出口　孝

和歌山グループの活動は、紀南が中心ですが、今後は卒業生の多い紀北での活動を多くしたいと常々考えています。そこで、昨年10月16日(土)に和歌山市で「親睦会」を行いました。

場所は、JR和歌山駅東側の『居酒屋・杉の子二重』で、この1週間前に家族で下見をしておきました。

私は、篠原氏と2人で、「サンマ寿司」・「磯物」を手土産に車で北上しました。寒川氏は講演会の帰りに、芝氏は出張の帰りによる予定でした。大阪からは、同窓会の実情に詳しい和歌山市出身の大牟田さんも「同級生が集まるならば」と来てくれることになっていました。

私と篠原氏の2人が会場に着いたのが6時前でした。2階に上がると「チャンコ鍋」が用意されていました。2人で生ビールを飲み、磯物を摘みながらメンバーが集まるのを待つことにしました。

一番最初に登場したのが、私の同級生で卒業以来24年ぶりに会う与平名(谷口)さん(電気屋↖

↙さん〉。名簿に住所が載っていなかったために連絡が取れなかっただけで、案外近くにいたんですね。皆さん連絡はこまめにとりませんか。次が大牟田さん。そうこうしていると、英語での司会を無事終えられニコニコしながら大きな花束を抱えて寒川氏、最初は参加できないと言っていたが都合を付けてくださった上林さん〈エジプト航空勤務〉が登場。最後に、全国を飛び回っている梅干し会社の二代目芝氏。彼が会に参加するときはたいてい出張の帰りです。本当に忙しい人ですが、和歌山グループの会計として、またアイディアマンとして貢献してくれています。

全員がそろって鍋にも火が入りました。私には、小さな同窓会になりました。大学祭の事、今後の和歌山グループの事で大いに話題が盛り上がりました。

紀北の連絡係を与平名さん〈33-7361〉が受けて下さいました。特に何をするでもありませんが、連絡を取り合い、思い出話をしたいと思います。

さしあたってこの4月頃に、手作り弁当で紀三井寺か和歌山城の桜でも眺めながら雑談でもしませんか。皆さん「つれもていこらよ。」

就職部主催、同窓会後援

「学内・企業研究会」開催される!!

'92英文卒　前中　正彦

大学生の就職環境は超氷河期と言われて、かれこれ5年ほどが過ぎようとしている。好転するどころか、ますます窓口は狭くなり厳しさを増すばかりである。英知大学にとっても同じで、大学関係者も四苦八苦の日々である。

ところで、さまざまな支援活動が推進される中で、就職部主催の「学内・企業研究会」は就職課の事業計画の中でも重要な企画であり、本年で3回目を迎え、年々その内容の充実と効果を上げている。英知大学同窓会は、事業計画の一環として「英知大生の就職活動支援」を掲げており、初回よりその後援をおこなっている。援助費は開催費用の15%を占め、大学ならびに在学生に大変喜ばれているとともに同窓会にとっても大切な活動である。参加した3回生には「Sapientia University」と名入れした記念品のブリーフケースが贈られている。中には、同窓会会長からの趣旨説明と激励の文書が同封されている。

この度の「学内・企業研究会」は、2月7日～8日の2日間、学生会館で開催され、19業種・30社の企業の参加と、両日で225名の学生が出席した。会場は企業ごとにパネルで区切られたブースで、採用担当者と直接面談するという形式である。中には神戸ポートピアホテルの木崎隆嘉氏のように卒業生の方も参加されており、後輩にとりわけ熱心に説明をされている姿は同窓生ならではの光景であり、今後このような参加が一層期待される。

参加した学生の話には「本音で求人採用の話や人生の話をしてくださり、生の就職活動のポイントが解り大いに役立った」とか「幅広く業界や企業の研究をするきっかけができた」と喜ばれていた。一方、企業の担当者からは「とても熱心に話を聞き、素直な学生が多い」、反面「全体的におとなしく、意欲がもう少し感じられない」と言う厳しい声もあった。

今日の社会では、学生に対して人間の本質でもある「いかに幸せに、心豊かに生きるか」という生きがい、人生の目的意識を明確に持った人が求められる。これはある意味、社会人となって何年か働いた後にぶつかる壁のように思われるが、決まって求められているため充分な準備が必要である。私は、縁あって昨年四月より本学の就職課に勤務することとなったが、驚いたことに、どこの大学でも就職活動の準備の中心は「自己分析」なのである。数年前までは、考えられなかったことである。過日の毎日新聞社社説に「厳しい就職戦線に直面する今の若者は、どんな仕事をしたいのか、人生の豊かさとは何なのかを考えることを迫られている。試練ではあるが、どんな時代でも、いずれは誰もが直面する問題だ。受け身ではない、自立した自分の人生を築き、歩んでいく契機にしてほしい」とあった。

今、私たちができる最も大切なことは、学生に私たちのビジョンを見せることである。私たちが「どう生きるか」ということが求められている。これからは「まず自分がどう生きるか」を選択し「自分が変わる」ことを決意することから始まるのではないか。

そして同窓会の活動は、本当に多くの人に支えられている。私は、昨年まで同窓会の役員をしていたが、今、学内に身を置いて解ることは、その活動の蔭には並々ならぬ努力があることを忘れてはならないということである。

最後に、各位のご厚誼に感謝するとともに、英知大生の就職活動に一層のご指導とご援助を賜りたいとお願いいたします。

起業家精神のすすめ

英知大学就職課課長　須澤　晃

果つる底なき

２０００年２月11日建国記念日の日、第44回江戸川乱歩賞受賞ドラマを見た。「果つる底なき・銀行の影に潜む巨悪犯罪」。資金繰りがうまくいかず窮地に追い込まれた会社社長は、取引先の銀行に融資を頼むが、支店長に拒否される。社長の自殺、担当行員の殺害、スナック経営者の死。主人公を取り巻く職業的立場と私欲が絡みあったサスペンスであった。全ての犯人は、主人公が信頼していた副支店長であったが、バブル経済後の政財界の裏舞台と人間ドラマを見るようであった。この「果つる底なき」とは、今日の社会を適格に表現している。

二十一世紀の夢

１９７７年、松下電器産業の創業者松下幸之助は、その書『私の夢・日本の夢―二十一世紀の日本』で政治家たちを「日本の国会議員は党員であっても党利党略に走らず、常に国民全体の代表者としての自覚をもって行動する」と評している。はて、どこの国のことかと耳を疑う。実はこれは物語である。それは１９４６年に設立したＰＨＰ研究所創設30周年記念の書であり「二十一世紀の日本はこうなっているであろう」「二十一世紀にはこういう好ましい状態であってほしい、またそういう社会を実現していかなくてはならない」ということを、単なる未来予測ではなく学問的予測でもない会話体で物語風に書いている。各章は、経済・経営・教育・宗教・国土社会・政治に分かれて物語が進む。時は２０１０年である。つまり30年後を想定し、日本人に夢と期待、そして警鐘を述べている。創造的で一人ひとりが生きがいを感じられる、そのような社会創成を期待した。

ところで、２０００年の世界の人口は約60億、日本の人口は１億２５００万人である。世界の人口は増え続け日本の人口は減り続ける。問題はさらにその内容であり、２１００年には、日本の人口は現在の約半分の６７００万人と予想されている。これは現在の若者の人口と出生率から割り出せる。その時、約三分の一が65歳以上となるのである。誰がこの社会を維持し人々の生きがいを守るのか。大正10年の定年は55歳で平均寿命は61・5歳であった。男は職を辞してから僅か6年で死んでいった。今日、定年は60歳、平均寿命は77・2歳。この17年間、如何に社会全体で老後を保証し「生きる」ことを共有する社会を創るか。生きがいの創成である。若者に老人たちの生きる精神的経済的保証をさせるのは、彼らの生きがいを奪うものである。今の政治家たちの法律づくりは、松下幸之助の思いとは大きくかけ離れ、場当たり的票取り合戦としか見えない。更には、果つる底なき、立場と私欲に囚われ倫理観の麻痺した社会構造をつくり上げた。われわれ一人ひとりが個人と社会に関する考え方生き方を考え直さなくてはならない。

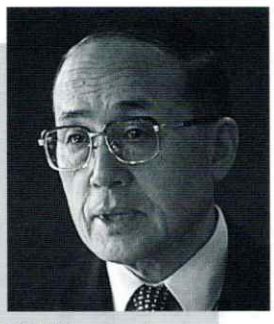
デジタル時代

さて人類はその長い歴史の中の僅か２００年の間に「産業」の目覚ましい発展を遂げた。そして今日、大量生産大量消費から大量廃棄という地球規模の犯罪を産むこととなった。さらに二十世紀の最後の10年間では、ＩＴ革命による大社会変革を進めている。コンピュータと通信技術の核となる「デジタル」というキーワードは、社会の全ての運用形態を変えている。近未来には社会生活の中から、紙幣貨幣は姿を消すであろう。缶コーヒーの自動販売機も地下鉄の切符も携帯電話で処理され、トヨタやホンダからは、ハンドルの消えた車も登場するであろう。そんな時代の実現には、もう２００年も要しない。英知大学創立50周年を迎える時には、このようなデジタルシステムが実現している。

自己実現への道

このような環境の中で、はたして生きがいの創成は可能であろうか。日本においては集団や組織における同一行動を取ることは得意でも、固有の判断で個別の行動を取ることは極めて困難なことが多いのである。教育がそのようにさせてきたのである。揚げ句の果てが偏差値教育である。充分に物質的機構的「豊かさ」は得られたが、「心の豊かさ」はどうであろうか。組織依存型より独立自存型の起業家精神は、組織活性と維持に意味を持つ。指示待ち人間、寄らば大樹人間を非難するが、これは指示を待つように、大きな傘に入るように教育した結果なのである。大企業や大組織の下でもちろん生きがいを得た人は多いことであろう。人はその成長過程の中で年齢と共に、成長期から成熟期へと向かい、他者のために働き自己を受け容れる中で自己実現を果たす。単に職が少ない時代だから会社を創れというのではない。前に習い横に合わせる今日までの大企業職業術ではなく、自分の幸せ豊かさは自分サイズのものが最も適切であり、自分でつくるものであるということである。そのためには家庭で初等中等教育のなかで、自分を探すことが必要である。自分のできることを探すことである。更には大学教育の場では、さまざまな形態で起業家精神を体験させることである。学内外での起業家活動に対し社会全体がそれを見守り育てる目と心が、今こそ大切である。大組織でしかできないことも多いが、少数で心の行き届いた事業が求められることもまた多い。富に富を重ね粉飾された顔で歩くより、身軽ですがすがしい生き方が求められる時代である。しかし、事業とはその大小を問わず容易なものではない。個性と能力を「発揮」し社会に「貢献」し、一人ひとりが仕事のやりがいと人生のいきがいを見いだせる人となることが期待される。

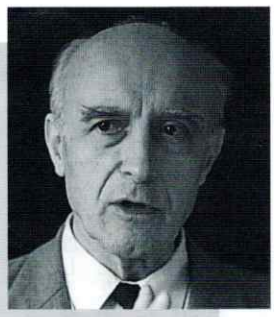
退官された先生からのメッセージ


傘木澄男先生

私は32年間英知大学に勤めさせて頂いて、昨春定年で退職しました。在職中大学の全ての方々にお世話になりましたことに、様々な体験と共に思い起こしながら、深い感謝を覚えております。当初は、大学の歴史未だ浅く、今では想像できないような鄙びた環境とキャンパスでした。今は構内に高く聳える樹木も、まだ植えたばかりで人の背丈ほどのもので、18年間構内の教授館に住んでおりました間、年毎に伸びていく樹木を眺めて楽しみながら、その成長ぶりに英知の成長の姿をダブらせて感心していたものです。学園が見違えるように大きく、美しくなったのを見て、今昔の感を覚えます。

私は神学科の神学や教会法などの専門科目も受け持ちましたが、主として一般科目の法学を毎年担当してきました。力一杯の授業をしてきたつもりですが、今から考えると色々反省することばかりで、学生の皆さんのご期待に添えなかったばかりか、随分ご迷惑をお掛けしてしまったという思いがしきりにいたします。そんな授業でも毎回90分忍耐して聴いて下さった学生諸君に、私はどれくらい支えられ、力づけられたことでしょう。今は感謝の思いでいっぱいです。人生の一番力の出せる時期を英知のためにお捧げできたことを幸運だったと思い、とても満足に思っています。退職後も教会の仕事で、相変わらず多忙な毎日ですが、英知のことをいつも思い出して、皆様の活躍と大学のご発展を心から祈っています。大学は今日受験人口の減少で大きな試練に直面していると聞いていますが、英知大学は建学の精神の初心にいつも帰り、築き上げられた英知の特色を生かしながら、皆で力を合わせていけば、きっと堅実な成長を続けていくと信じ祈っています。

その大きな支えと力となるのは同窓会の存在と活動だと思います。どうか卒業生の皆様の母校愛が英知を力強く引っ張っていってくれますように、心から祈ります。


デ・スカンフレール先生

1999年11月3日はとても喜ばしい一日でした。毎年、11月3日は、卒業生の「ホームカミングデー」となっていますので、現役の期間を貫いて、僕は毎年卒業生との再会を楽しみにしていました。その時、来てくれた人は多いときもあり、少ないときもありましたが、誰も来なかった年はありませんでした。

また、年月が経つにつれて、卒業生本人だけでなく、家族そろって来てもらったこともあれば、お父さんか、お母さんか、どちらかが一人で子供を連れてきたこともありました。中に、何年もの間、子供を連れてきた人もいて、子供が大きくなるのを親と一緒に喜ぶことができました。もちろん、反抗期に入った子は、来なくなるので、少々さみしかったこともあって心配する親と一緒に、子供がこの難しい時期を無事にくぐり抜けることができるように祈っていました。なんとなく、こういうとき、潜在意識の奥底に、"教え子"の思いは、"家族"の感じと等しいものになるに違いありません。

昨年のホームカミングデーは、僕にとって、言うまでもなく、特別でした。同窓会の係りの方が細かいところまで、退職した教師のことを考えてくれて、離れる寂しさを和らげるにぎやかで楽しく、同時に和やかな「追い出しコンパ」を企画してくれたことを大いに感心し、感謝もいたしました。

確かに、ホームカミングデーを企画するのは簡単なことではありません。にもかかわらず、その忙しさの中に、担当者は退職者のことをも入れるように心がけてくれました。骨折りの、大変な準備に追われていたに違いありません。準備委員会が一心に努力したおかげで、全部がスムーズに流れ、参加した全員が喜び、上機嫌で家への道を踏み出しました。

僕にとって忘れられない一日になりました。フランス語学科の卒業生に、特別に念を入れて連絡してくれた担当者がいましたので、仏文科の卒業生は多く、英知まで足を運んで来られました。次々に、懐かしい顔を見、忘れた名前を思い出したり、まだ会わなかった子供と初めて会ったりして、学生時代の「出来事」を、記憶の深みから呼び起こして、話題にしたり…やっぱり僕の胸にこれから記念するすばらしいひとときになってきました。

家に帰ってから、いただいた壮麗な花束を自分の書斎にも、こちらのチャペルにも生けて、その日の雰囲気を立派に保ち続けることができました。心がこもったプレゼントに「言葉ナシの本気」が潜んでいるのを何度も感じ、今でもその感じが胸に残っています。

これからも、英知の精神を咲かせるホームカミングデーは、過去と将来の卒業生にとって、ますます掛け替えのない貴重な日として大事にするように希望します。母校による家族的な絆、心の支えとなる力をいつまでも保ち続けるために。

※デ・スカンフレール先生からは、日本語で原稿をお寄せいただきました。

ＯＢ戦を終えて

英語英文科2回生　吉田太郎

昨年の11月3日、今年の1月4日と2回にわたって、サッカー部ではＯＢ・現役交流戦を行いました。両日とも、多くの方々の参加により、充実した交流戦となりました。

昨年の11月3日の交流戦の際には、新しくＯＢ・現役生の組織である「蹴英会」が設立され、サッカー部の輪が広がったように感じました。この組織は、突発的に設立されたのではなく、試行錯誤の結果、設立にたどり着くことができました。この点に関して、多くのＯＢの方々のご尽力に対し、サッカー部一同感謝しております。

この「蹴英会」に関して、少し述べさせてもらいますと、近年、どのクラブにも言えることですが、運営面において、決して楽な状況ではないということは否めません。サッカー部におきましても、登録費や参加費など個人の負担がかなり大きく、そのためにサッカー部を断念してしまう学生もいる、というのが現状です。この会の設立によって、この問題も軽減しました。

また、実際、社会で活躍している人との交流は、学ぶべき点が多いということも事実であり、交流戦の度に、ＯＢの方々から様々なことを現役生は学ぶことができます。社会の実情を聞いたり、就職の相談をしたり、あるいはサッカーのプレー面の改善点を指摘していただいたりと、多岐にわたった交流が現役生にとってプラスとなります。

この会の設立、交流戦によって、サッカー部に奥行きが出てきたように感じます。またそれと同時に、力強い組織のバックアップが今まで以上の成果や結果を期待できることにつながるのではないでしょうか。

さて、気になる交流戦の結果の方ですが、現役生が力を抜いても、ＯＢの体力がそれに勝ることはなく、大差で現役チームが勝利しました。しかし、ＯＢの方々の若き日の片鱗を見ることができ、楽しい時間をすごせました。

最後に、この「蹴英会」は長期的なヴィジョンで運営していき、5年、10年先には、より強固な組織となるように、また交流戦を通じて、ＯＢ・現役の輪が広がるように期待したいと思います。

第33回英南戦を終えて

第33回英南戦実行委員長
英語英文学科3回生　西浦　明倫

平成11年11月13日(土)・14日(日)の両日、先輩方が汗と涙で築かれた伝統の英南戦が南山大学において開催されました。参加団体は、昨年より2団体増えて、過去最高の14団体で、爽やかな秋晴れの下、熱戦を演じました。

参加団体の中で、男子ハンドボール部が初めて参加し、反対に昨年まで参加していた女子洋弓部は参加を見合わせました。

試合の結果は、2勝2敗で応援空しく残念な結果となりましたが、サッカー部が5対0で圧勝し、4年ぶりの勝利をもぎ取りました。また、3年ぶりに参加した準硬式野球部は22対3のコールドゲームでこちらも圧勝しました。

このように、それぞれの英南戦が一つの目標に向かって熱い情熱を燃やすとき、まさに伝統の英南戦に新しい伝統が生まれるときでもありましょう。

さて、この英南戦では過去幾多の好試合が演じられ、両校のスポーツ活動の隆盛に貢献してまいりました。こうした対抗戦を通じて培われたスポーツマン・シップと友情は、更に大きな伝統となって21世紀に引き継がれて行くことと思います。

なお、今年の英南戦は11月18日(土)・19日(日)の二日間に予定されております。

先輩諸兄姉におかれましては、是非とも20世紀最後となる今年の英南戦をご観戦いただき、青春の一ページを思い出していただければと念じております！

最後になりましたが、このような素晴らしい伝統の英南戦を築いてこられた先輩諸氏にあらためて心より感謝申し上げて、第33回英南戦のご報告にかえさせて頂きます。

編集後記

今回の春号で会報を刷新してから丸2年が経ちました。お陰さまで、原稿もいただけるようになって参りました。ご協力には心より御礼申し上げます。

実は同窓会としても、インターネットを利用しない手はないと、計画だけは暖めています。しかし、如何せん人手がありません。できれば次号ではホームページの案内を大々的にお伝えしたいと思っています。事務局への連絡経路としてメール・アドレス(sapiens@mbox.inet-osaka.or.jp)は用意できました。後はＨＰをお手伝いいただける方を大々的に募集致します。メールを利用すれば、大学近郊にお住まいの方以外でも充分にご参加いただけると存じます。ぜひ、是非、ご参加下さい。

「参加する同窓会」が、この沈滞ムードを一掃できる原動力の一つになればとも考えます。『誰かがやるだろう』式の発想を脱ぎ捨て、ぜひ、同窓会活動にご参加願えると幸甚です。

☆☆編集子☆☆

1999年度　英知大学同窓会　決算報告

（1998年10月1日～1999年9月30日）　（単位：円）

【収入の部】

費目	金額	摘要
前年度繰越金	7,403,867	
同窓会入会金収入	3,983,000	同窓会入会金収入
同窓会会費収入	1,128,000	終身会費及び年会費収入
名簿売上高	6,000	同窓会名簿売上高
受取利息	18,605	預金利息及び貸付金利息
雑収入	35,110	バザー売上他
合計	12,574,582	

【支出の部】

費目	予算	実績	摘要
旅費交通費	150,000	88,570	関東支部交流他
通信費	300,000	1,186,137	名簿郵送費他
監査費	120,000	120,000	会計監査
会費に関するシステム作成費	4,000,000	0	
事務用品費	200,000	93,261	消耗品
支払手数料	50,000	10,815	振込手数料他
会議費	700,000	519,649	役員会議費（年間20回）
事務局維持費	4,000,000	448,344	アルバイト代他
印刷費	3,500,000	2,298,719	会報年2回・名簿追補版他（郵送料含む）
OBクラブ開催費	1,000,000	1,020,073	Home Coming Day及び総会
助成金	2,500,000	1,179,000	助成金
献花費及び記念品費	1,100,000	1,071,020	入学・卒業・開学35周年記念他
配付金	450,000	350,000	関東支部運営費
雑費	200,000	46,744	写真代他
予備費	8,233,867		次年度繰越金等
合計	26,503,867	8,432,332	

前年度繰越額	7,403,867
本年度収入額	5,170,715
本年度支出額	8,432,332
次年度繰越額	4,142,250

財産目録

（1999年9月30日現在）　（単位：円）

【資産の部】現金及び預金	現金		
		本部現金	1,202,217
		事務局現金	1,487
		合計	1,203,704
	普通預金		
		さくら銀行/園田支店	336,351
		さくら銀行/園田支店	1,088,234
		さくら銀行/園田支店	200,472
		さくら銀行/難波支店	410,033
		合計	2,035,090
	貸付金	学費支援貸付金	110,000
		〃	64,164
		〃	128,334
		〃	420,000
		合計	722,498
	未収入金	貸付返済滞り額	294,692
		〃	19,266
		合計	313,958
		資産の部合計	4,275,250
【負債の部】未払金		監査費	120,000
		預り金	13,000
		負債の部合計	133,000
【次期繰越金】			4,142,250

2000年度　英知大学同窓会　予算案

（1999年10月1日～2000年9月30日）　（単位：円）

2000年度　事業計画案

(1) 同窓会入会金の徴収、同窓会会費の徴収
(2) 同窓会組織の充実
(3) 同窓会「会報」の充実

2000年度は上記を目標に活動したいと考えます。皆様の暖かい御支援を心よりお願い申し上げます。

【収入の部】

費目	金額	摘要
前年度繰越金	4,142,250	
同窓会会費	5,400,000	平成12年度新入生 20,000円×270名
在校生入会金	16,160,000	1回生16名・後期分382名、2回生85名、3回生251名、4回生259名
年会費	300,000	年会費 3,000円×100名
終身会費	900,000	終身会費 30,000円×30名
受取利息	100,000	
合計	27,002,250	

【支出の部】

費目	予算	摘要
旅費交通費	200,000	関東支部交流他
通信費	1,700,000	会報送付・電話代他
監査費	120,000	会計監査
事務用品費	100,000	消耗品
支払手数料	50,000	振込手数料他
会議費	700,000	役員会議費（年間約20回）
事務局維持費	2,000,000	アルバイト代他
印刷費	2,500,000	会報年2回・名簿追補版・案内状・委任状他
OBクラブ開催費	1,200,000	総会及びHome Coming Day
助成金	1,500,000	実行委員会、クラブ・クラブOB会、クラス会、留学生、会社説明会等
会費に関するシステム作成費	2,500,000	名簿調査費含む
献花費及び記念品費	100,000	入学・卒業式献花代
配布金	450,000	関東支部・和歌山グループ運営費
雑費	200,000	写真代他
予備費	13,682,250	次年度繰越金等
合計	27,002,250	

「大学祭実行委員長より」

英語英文学科3回生　山田　藍

私は、大学に入ってから学園祭に3度関わってきました。1度目は、初めての経験ということもあって、先輩方に教えられ様々なことを学びました。少人数だったこともあり、一人一人がいくつもの仕事をかけもちし、与えられた仕事をこなしていくのが精一杯でした。

2度目は、先輩たちが卒業され、私たちが先頭に立って実行委員会を引っ張っていくことになりました。いろいろと問題もありましたが、メンバーに恵まれ、前回よりも手応えのある学園祭になりました。

99年度の学園祭は、3度目ということもあって、私たちも学園祭実行委員会の運営について、いろいろと考えられるようになりました。そして、新しい試みということで、今回の学園祭は、同窓会の方々に協力して頂き、色々な新しいアイデアや実行委員会だけでは企画だけで終わってしまうようなファイヤーストームなども実現し、今後の学園祭の幅も広がったように思われます。ただ、過去に同窓会と拘わって学園祭を開催したという前例がなかっただけに、どういう形で同窓会の方たちと話を進めていけばいいのかということで、私たち実行委員側はとても戸惑いました。しかし、今回新しい形で学園祭を運営し、いろいろと見えなかったものが見え、これからの学園祭にとって大きな転機になることを期待しています。

ビンゴゲームで…

'79英文卒　武庫　千昭

ここ数年遠ざかっておりましたが、今回、当時在籍していたクラブの先輩や後輩にお誘いの電話いただき、久しぶりに夫婦揃って大学祭に行かせていただきました。

懐かしい方々にお会いし、想い出話や近況を話しながら楽しい時間を過ごさせていただきました。

妻も思いもよらず懐かしい同級生に会うことができ、本当に喜んでおりました。

遠くに住んでいる方も多いので仕方ないのかもしれませんが、懐かしい方々に会えるのも実際は僅かな人数で、卒業以来会っていない方々の数の方が多いのが現実です。

もっと多くの卒業生が大学祭に来られることを願うとともに、私自身、できる限り行かせていただき、思いがけない出会いが多く有ることを願っています。

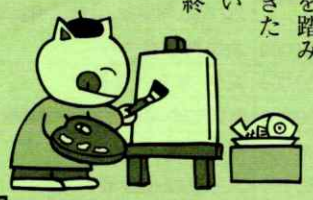
ただひとつ、建物を始め学校が立派になり、OB会のパーティーはいつもより盛大になっていたように思いますが、その反面、模擬店などもグランドにしか見ることができず、大学祭そのものが小規模になっているようで寂しい思いがしました。以前は、お金を掛けることなく、それぞれのクラブが、内装に工夫を凝らした模擬店や展示、演奏等を行っておりました。ユースは周遊軒、ワンゲルはケルンと、名前だけでも懐かしく思います。時間が経てば色々なことが変わって当たり前だとも思いますし、お世話役として大変なご苦労をお掛けしている方々には申し訳ないのですが、そのような雰囲気を感じさせていただければもっと良かったように感じました。

最後になりましたが、メインイベントの大ビンゴゲーム大会で、5万円のホテル券を頂きましたことをお礼申し上げます。この原稿代としてお許しください。

昨年のホームカミングデーは、初めて「大学祭実行委員会」との連携を試みました。夏期合宿・事前の役員月例会には在校生に参加願い、大学祭直前の打合せには実行委員諸君の合宿所（懐かしの教授館）へ押し掛けました。同窓会として大学祭に模擬店を出店したり、イベントへの協賛、合同イベントも試み、同窓会正会員（卒業生）・準会員（在校生）の交流は楽しいものになりました。当初は戸惑いもみられた実行委員の皆さんも、直前打合せでは同じ英知の仲間として和気あいあいの「和み」を見せてくれました。

今後も「協賛」の形をとり、同窓会員相互の交流の場として定着させたいと考えています。アイデア・ご参加等、皆々様の参加をお待ちします。

ホームカミングデーには参加者が年々増加し、学生食堂に入りきれなくなるのではと、うれしい悲鳴をあげています。ただそれに比して「総会」への出席者・委任状送付者が少なく、今回も議決定数に達せず「仮議決」となりました。

NPOだ、自治の時代だと声高に叫ばれてはいますが、今一度、母校の同窓会をそんな観点から考えてみていただけないでしょうか。ご承知のように我が母校は、学生の絶対数が少なくスケールメリットは享受できません。翻って考えると分母が小さい分、一人ひとりの参加意識が大きく反映されるということになります。まずは、入会金、委任状、年会費から参加願えると、母校とともに発展が可能になると考えます。

ぜひ、開学50周年にむけて第一歩を踏み出して頂きたいとお願いして稿を終えます。